



かるたを取り合う衣川中生と振興会役員ら

かるたを通して地域の歴史に触れてもらおうと1月9日、衣川山村開発センターを会場に衣川歴史かるた大会が開かれました。同地区振興会（佐藤利男会長）が初開催し、地元小中学生ら約70人が参加しました。

大会に使用したかるたは、旧衣川村が制作した「衣川歴史かるた」。例えば読み札「い」は「古の歴史息づく衣川」と始まり、以降すべての札が衣川の歴史にちなんだ内容になっています。同振興会事務局員長の小野寺精一さんは「地元の歴史について学びながら世代間交流にもつなげていきたい」と夢中になる小学生らの様子に目を細めていました。

地域の歴史に誇りを持って
第1回衣川歴史かるた大会開催

まちの話題



文士劇と市民劇の融合を目指す奥州市民★文士劇「大岡越前」（同実行委員会主催）は1月24、25の両日、江刺体育文化会館で開かれました。初開催だった昨年の好評の声に応え、ことしは2日間で3回公演され、合わせて1820人が楽しみました。

初回の「水戸黄門」と同様に、テレビドラマでおなじみの江戸南町奉行、大岡忠相の名奉行ぶりを骨格にしながらも、消防団員がまとい振りやはしご登りを披露する場面なども盛り込まれました。市の産業や文化、笑いの要素が随所にあり、飽きさせない舞台に仕上がりました。

ゲスト文士として作家の高橋克彦さん、IBCの風見好栄アナウンサーらが出演しました。渡辺幸貴県議会議長、相原正明市長らの地元文士も昨年に続き堂々とした演技を披露。合計約220人の市民が公演を支えました。

見事大岡裁きに観客も納得

「大岡越前」テーマに市民文士劇



テレビドラマでおなじみ、江戸南町奉行所での取り調べの場面

伝統を引き継いで心新たに

前沢42歳厄年連が祭典事務所開き



平成21年奥州前沢42歳厄年連「鳳翔猿舞会」（三浦純会長）の祭典事務所開きは1月10日、前沢区字七日町の同会事務所で会員ら110人が参加して行われました。神事に続き、志和正浩祭典実行委員長が前年度厄年連「桜未申友会」（鈴木雅彦会長）の門脇寛幸祭典実行委員長から伝統の看板の引き継ぎを受けると、会員らは4月19日に行われる奥州前沢春まつりの成功に向け、決意を新たにしている様子でした。

同会が取り組むのは、創作演舞「以心伝心一高鳴る鼓動！鳳翔猿舞の舞!!」。春まつりで披露に向け、現在週3回の練習に汗を流しています。

学んだ技術を生かし恩返し

高校生が手作りベンチを寄贈

特別養護老人ホーム聖愛園（滝沢徳雄園長）で1月21日、県立岩谷堂農林高校の生徒が手作りしたベンチ3脚の贈呈式が行われました。

寄贈したのは産業工学科3年の生徒8人。同校では、3年生になると課題研究としてテーマを設定。班ごとに目標や計画を立て、学校で学んだ専門知識や技術を社会貢献に生かす活動に取り組んでいます。8人はものづくり班に所属し、設計から製作まですべてを担当しました。背もたれの角度や床に傷を付けないため補助用具、着脱式のテーブルなど、ベンチにはたくさんのアイデアと思ひやりが詰まっていました。



座り心地を確かめる入所者と生徒

男衆の掛け声が山々に響く

黒石寺蘇民祭にいつもの平穏戻る



蘇民袋をめくり激しい争奪戦を繰り広げる

東奥の奇祭として全国的に知られる黒石寺蘇民祭が2月1日の夜から翌朝にかけて行われました。下帯姿の男衆が、川で身を清める裸参りや蘇民袋争奪戦などを繰り広げ、五穀豊穡と災厄消除を祈願しました。

昨年はポスター騒動で172人もの報道関係者が殺到しましたが、ことしは半分以下の68人に減少。一方、騒ぎを敬遠して少なくなっていた争奪戦の参加者や観光客は、県内はもちろん、全国各地からも訪れたため、例年並みに回復しました。祭りの関係者は、大きな騒動もなく、祭りの知名度もさらに高まったことから、胸をなで下ろしていました。

農はだてに向けて準備よし

4年に一度の福俵作りに汗

全日本農はだてのつどい最大の見せ場となっている福俵引きで使用する大俵は、直径2.5m、長さ4m、総重量約7tで、4年に1度作り替えられます。ことしは作り替えの年に当たり、胆沢区南都田の小野寺わら工房（小野寺延吉代表）では、1月中旬から地元のベテラン農家ら10人が福俵作りに汗を流しました。

福俵は全体を支える骨格を除き、約2反部相当分の稲わらのみで組み立てられます。小野寺代表は、自身が考案者でもある福俵について「5回目の製作になるが、20回目の年に合わせて最高のものができそう」とお披露目となる2月14日が待ちきれない様子でした。



左右に移動しながら2人1組で作業